

古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけての東北地方日本海側の様相

Aspects of the Districts Bordering the Japan Sea in the Tohoku Region
from the Kofun Period through to the Asuka and Nara Periods

藤沢 敦

FUJISAWA Atsushi

はじめに

①弥生時代後期の問題

②古墳の築造動向

③統縄文文化の動向

④「末期古墳」の動向

⑤城柵遺跡の展開過程と蝦夷の領域

⑥東北地方日本海側の特質

おわりに

【論文要旨】

古墳時代から飛鳥時代、奈良時代にかけての、東北地方日本海側の考古資料について、全体を俯瞰して検討する。弥生時代後期の様相、南東北での古墳の築造動向、北東北を中心とする統縄文文化の様相、7世紀以降に北東北に展開する「末期古墳」を概観した。さらに、城柵遺跡の概要と、「蝦夷」の領域について文献史学の研究成果を確認した。その上で、日本海側の特質を太平洋側の様相と比較しつつ、考古資料の変移と文献史料に見える「蝦夷」の領域との関係を検討し、律令国家の領域認識について考察した。

日本海側の古墳の築造動向は、後期前半までは太平洋側の動向と基本的に共通した変化を示すことから、倭国全域での政治的変動と連動した変化と考えられる。ところが後期後半以降、古墳築造が続く地域と途切れる地域に分かれ、地域ごとの差違が顕著となる。終末期には太平洋側以上に地域ごとの差違が顕著となる。時期が下るとともに、地域独自の様相が強まっており、中央政権による地方支配が強化されたと思えることはできない。

統縄文文化系の考古資料は、日本海沿いでは新潟県域まで分布し、きわめて遠距離まで及ぶ。また海上交通の要衝と考えられる場所に、統縄文文化と古墳文化の交流を示す遺跡が存在する。これらの点から、日本海側では海上交通路が重要な位置を占めていた可能性が高く、統縄文文化を担った人々が大きな役割を果たした可能性が指摘できる。

文献史料の検討による蝦夷の領域と、考古資料に見られる文化の違いは、ほとんど対応しない。日本海側では、蝦夷の領域と推測される、山形県域のほぼ全て、福島県会津盆地、新潟県域の東半部は、古墳文化が広がっていた地域である。両者には、あきらかな「ずれ」が存在し、それは太平洋側より大きい。この事実は、考古資料の分布に見える文化の違いと人間集団の違いに関する考えを、根本的に見直すことを要求している。排他的な文化的同一性が先に存在するのではなく、ある「違い」をとりあげることで、「彼ら」と「われわれ」の境界が形成されると考えるべきである。これらの検討を踏まえるならば、律令国家による「蝦夷」という名付けは、境界創出のための他者認識であったと考えられる。

【キーワード】古墳文化、統縄文文化、城柵、東北地方、日本海、海上交通

はじめに

本論では、古墳時代から飛鳥時代、奈良時代にかけての、さらに一部は平安時代を含め、東北地方日本海側の考古資料の様相について、全体を俯瞰して通覧することを試みたい。そのことから、当該地域における研究の現段階と課題を探ってみたい。

資料の増加とともに研究が細分化されていくことが各地で指摘されているが、当該地域も例外でない。古墳時代研究では、各県単位での整理は比較的多いものの、全体的に俯瞰した論説はほとんどない。東北地方全体を概観した論説もあるが、南東北と関係の深い新潟県域まで含めて論じられた論説はほとんどない。古代においても、広範囲に検討された論説は、城柵遺跡の展開過程などについて見られる程度である。

周知の通り古墳時代には、南東北までは古墳文化が波及するが、北東北には続縄文文化が南下してくる。7世紀以降には、北東北にも土師器と方形竪穴住居からなる倭系の文化が広がるが、独自の「末期古墳」が築造されるようになる。このように南東北と北東北の違いが明確となる古墳時代から、律令国家が城柵という特別の支配を行う奈良・平安時代まで、やや長い期間を概観してみたい。

検討の対象とする範囲は、南東北と北東北を合わせて、さらには南東北と関係が深い新潟県域を含めて俯瞰してみたい。⁽¹⁾すなわち、北から青森県津軽地域、秋田県・山形県（出羽国）、福島県会津盆地（陸奥国の一部）、さらに新潟県域（越後）までである。福島県の会津盆地は、県単位の検討では福島県域に含まれる。古代には陸奥国に属するため、この点からも太平洋側の地域と一緒に検討される場合が多い。しかし会津盆地は、河川流域では日本海側の阿賀野川流域であり、新潟県域との関係を抜きにしては論じられない。

日本海側は発掘調査の件数が少ない地域も多く、資料が太平洋ほどは充実していないため、不明とせざるを得ない部分も多くある。それでも、全体を俯瞰して通覧してみることに、一定の意味があるだろう。本論では、個々の資料をあらためて再検討することは、ほとんど行っていない。そのため編年研究の成果など、多くは先行研究に負っている。それらの研究を踏まえ、広い範囲において、やや長期間の様相を概観することから、研究の現段階と課題を探ってみたい。具体的には、以下のような項目ごとに検討し、日本海側の動向を総合的に把握することを試みたい。

まず古墳時代の前段階の弥生時代後期の様相を見た上で、南東北の古墳文化の様相を、古墳の動向を中心に検討する。加えて、古墳文化に対峙する北東北を中心とする続縄文文化の様相と、7世紀以降の「末期古墳」などの動向を概観する。⁽²⁾さらに、城柵遺跡の様相と、文献史料に見える「蝦夷」の領域を確認する。その上で、日本海側の特質を太平洋側の様相と比較しつつ、考古資料の変移と文献史料に見える「蝦夷」の領域との関係を検討し、律令国家の領域認識について考察してみたい。

①……………弥生時代後期の問題

東北地方の弥生時代後期の様相については、なお実態が不明な点が多い。全般に遺跡数は減少し、そのため土器の変遷についても、地域ごとの細かな様相など、明確でない部分も多い。大きく見るならば、天王山式から踏瀬大山式に併行する段階、さらに撚糸文系土器という段階で変遷し、続いて南東北では土師器へと変換していくことについては、おおむね共通理解が得られていると考えられる。他地域との併行関係については、安定した共伴例が乏しく、なお異論もあるが、天王山式以降の段階が弥生時代後期に相当すると考えておきたい〔石川 2000〕。

北東北では、続く古墳時代併行期には続縄文文化が広がり、一度波及した農耕から、再び獲得経済へと生業が変化する。そのため、弥生時代後期以降の変化については、水田稲作をはじめとする農耕が衰退していく過程としてとらえ、その原因のひとつに気候の寒冷化が指摘されることも多い〔辻 1996〕。一方、本来の分布域を越えて、天王山式系遺物が分布していることも知られている。特に、日本海側では、北陸地方に天王山式土器などが多く分布しており、広域での交流が活発化していた可能性が指摘されている。この時期に進行したであろう石器から鉄器への転換や、鉄器に代表される広域流通物資の入手方法と関係する可能性も考えられる。ただ、弥生時代後期の生業の変化や、それらと関わるであろう社会の変化について、総合的に検討された論説は少なく、今後の大きな課題であろう。

②……………古墳の築造動向

(1) 古墳文化の分布範囲

近年の土器の編年研究と併行関係の解明が進んだことにより、定式化した前方後円墳の成立にほとんど遅れることなく、南東北まで古墳文化が波及していることが明らかとなってきた。古墳文化に伴う土師器を伴う方形竪穴住居は、まとまって展開するのは山形県北部の庄内平野までである。これより北の秋田県・青森県域では、土師器や方形竪穴住居は、点的に存在する事例が少数存在するだけである。太平洋側も同様で、宮城県北部までは土師器を伴う方形竪穴住居がまとまって展開するが、岩手県以北では一部で確認されているにとどまる⁽³⁾。

古墳の分布範囲は、古墳文化がまとまって展開する地域とほぼ共通し、日本海側では山形県域、太平洋側では宮城県域までとなる。ただし、古墳の分布は、時期によって大きく変動するため、この範囲において常に古墳が築造されていた訳ではない。後述のように日本海側では、前期古墳は山形県北部の庄内平野に存在するが、中期以降は確実な事例がなく、山形盆地（村山盆地）が北限となる。このように古墳分布は、時期が下るとともに拡大する訳ではなく、むしろ縮小している可能性が高い。

図1に、東北地方と新潟県域での前方後円墳・前方後方墳の分布を示した。また、表1に、日本海側の前方後円墳・前方後方墳の一覧表を示しておいた。古墳時代の全期間を通じて、安定して前



図1 東北地方と新潟県域での前方後円墳・前方後方墳の分布

方後円墳・前方後方墳が存在する地域は見られない。福島県会津盆地や山形県米沢盆地（置賜盆地）は、前期の前方後円墳・前方後方墳は比較的多く分布しているが、中期以降は限定されたものになってしまう。

(2) 古墳の変遷

以下では、古墳の変遷について、時期ごとの変化を見ておきたい。図2に、東北地方の主要古墳の編年を示した⁽⁴⁾。比較のために、太平洋側の地域も含めている。編年基準は、『前方後円墳集成』の共通編年〔広瀬1991〕を使用する。古墳の展開過程は、南東北の太平洋側と共通する部分が多いので、これまでに論じてきた太平洋側の変遷段階に沿って見ていきたい。なお、以下では、当該地域を、a) 新潟西部（阿賀野川以西）、b) 新潟東部（阿賀野川以東）、c) 会津盆地、d) 米沢盆地、e) 山形盆地、f) 庄内平野と6区分して記述する⁽⁵⁾。

表1 日本海側の前方後円墳・前方後方墳リスト

	古墳名称	所在地	墳形	規模	特徴	備考
山形県	坊主窪1号墳	東村山郡山辺町	前方後円墳	26.5 m		
	土矢倉2号墳	上山市	前方後円墳	27 m	埴輪・箱式石棺	
	蒲生田山2号墳	南陽市	前方後円墳	約30 m		
	蒲生田山3号墳	南陽市	前方後方墳	29 m		
	蒲生田山4号墳	南陽市	前方後方墳	29 m		
	稲荷森古墳	南陽市	前方後円墳	96 m		
	竜樹山17号墳	南陽市	前方後方墳	30 m		
	経塚山2号墳	南陽市	前方後円墳	30 m		
	経塚山6号墳	南陽市	前方後方墳	30 m		
	経塚山9号墳	南陽市	前方後方墳	24 m		
	戸塚山139号墳	米沢市	前方後円墳	54 m		
	宝領塚古墳	米沢市	前方後方墳	約70 m		
	成島1号墳	米沢市	前方後円墳	約60 m		
	京塚4号墳	米沢市	前方後円墳	39.4 m		
	下小松 J-1号墳	東置賜郡川西町	前方後方墳	17.8 m		陣か峰支群
	下小松 K-5号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	24.4 m		小森山支群
	下小松 K-7号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	26.5 m	木棺直葬	小森山支群
	下小松 K-9号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	22 m		小森山支群
	下小松 K-21号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	21.2 m		小森山支群
	下小松 K-29号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	21.4 m		小森山支群
	下小松 K-31号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	21 m		小森山支群
	下小松 K-34号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	22.2 m		小森山支群
	下小松 K-36号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	25.5 m	木棺直葬	小森山支群
	下小松 K-42号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	22.3 m		小森山支群
	下小松 K-46号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	22.4 m		小森山支群
	下小松 K-61号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	33.8 m		小森山支群
	下小松 K-53号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	21.7 m		小森山支群
	下小松 K-55号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	20.8 m		小森山支群
	下小松 K-61号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	23.3 m		小森山支群
	下小松 K-68号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	21.9 m	木棺直葬	小森山支群
	下小松 K-75号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	18.5 m		小森山支群
	下小松 K-77号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	17.7 m		小森山支群
	下小松 T-9号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	19.7 m	木棺直葬	鷹侍場支群
	下小松 T-37号墳	東置賜郡川西町	前方後円墳	25.6 m		鷹侍場支群
	天神森古墳	東置賜郡川西町	前方後方墳	75.6 m		
福島県 会津地方	田村山古墳	会津若松市(旧北会津村)	前方後円墳？	26 m		
	飯盛山古墳	会津若松市	前方後円墳	約60 m		
	堂ヶ作山古墳	会津若松市	前方後円墳	84 m		
	会津大塚山古墳	会津若松市	前方後円墳	114 m		
	一箕山古墳	会津若松市	前方後円墳	約90 m？		
	屋敷7号墓	会津若松市	前方後方墳	16.6 m		
	十九壇3号墳	喜多方市(旧塩川町)	前方後方墳	23.8 m		
	深沢古墳	喜多方市(旧塩川町)	前方後方墳	41.5 m		
	田中舟森山古墳	喜多方市(旧塩川町)	前方後方墳	60～70 m？	野焼埴輪	
	灰塚山古墳	喜多方市	前方後円墳	61.2 m		
	天神免1号墳	喜多方市	前方後方墳？	約40 m		
	虚空蔵森古墳	喜多方市	前方後円墳	46 m		
	亀ヶ森古墳	会津坂下町	前方後円墳	127 m	野焼埴輪・葺石	
	鎮守森古墳	会津坂下町	前方後方墳	55.2 m		
	男壇2号墓	会津坂下町	前方後方墳	24.5 m		
	男壇3号墓	会津坂下町	前方後方墳	15.2 m		
	男壇4号墓	会津坂下町	前方後方墳	20 m		
	男壇5号墓	会津坂下町	前方後方墳	10.2 m		
	宮東1号墓	会津坂下町	前方後円墳	31.1 m		
	宮東2号墓	会津坂下町	前方後方墳	14.6 m		
	白ガ森古墳	会津坂下町	前方後円墳	50 m		
	杵ガ森古墳	会津坂下町	前方後円墳	45.6 m		
	稲荷塚2号墓	会津坂下町	前方後方墳	12 m		
	稲荷塚3号墓	会津坂下町	前方後方墳	13.8 m		
	稲荷塚5号墓	会津坂下町	前方後方墳	14.5 m		
	稲荷塚6号墓	会津坂下町	前方後方墳	23.5 m		
	稲荷塚10号墓	会津坂下町	前方後方墳	？ m		
	鍛冶山4号墳	会津坂下町	前方後円墳	21 m		
	出崎山1号墳	会津坂下町	前方後方墳	25 m		
	出崎山2号墳	会津坂下町	前方後方墳	33 m		
	出崎山3号墳	会津坂下町	前方後円墳	21 m		
	出崎山7号墳	会津坂下町	前方後円墳	29.3 m		
	雷神山1号墳	会津坂下町	前方後円墳	47 m		
	森北1号墳	会津坂下町	前方後方墳	41.4 m		
	高寺山古墳	会津坂下町	前方後円墳	約48 m		
新潟県	山谷古墳	新潟市(旧巻町)	前方後方墳	37 m		
	菖蒲塚古墳	新潟市(旧巻町)	前方後円墳	54 m		
	稲場塚古墳	西蒲原郡弥彦村	前方後円墳	26.3 m		
	三王山1号墳	三条市	前方後円墳	37.5 m		
	三王山1号墳	三条市	前方後方墳	16.1 m		
	大久保1号墳	長岡市(旧寺泊町)	前方後方墳	25 m		
	大久保2号墳	長岡市(旧寺泊町)	前方後方墳	18 m		
	下小島谷1号墳	長岡市(旧和島村)	前方後方墳	17 m		
	下小島谷2号墳	長岡市(旧和島村)	前方後方墳	12.2 m		
	吉井行塚1号墳	柏崎市	前方後円墳	32 m		
	菅原31号墳	上越市(旧清里村)	前方後円墳	29 m		
	観音平4号	妙高市	前方後円墳	33 m		

＝前期(1～4期)＝

大和で定式化した前方後円墳が成立するのに、ほとんど遅れることなく、南東北まで古墳が波及してくる。ただ、前期前半に遡る大型古墳は限られているのが現状で、古墳の波及の様相は一律でない可能性が考えられ、個別具体的に検討していく必要がある。調査の進展度合いに左右されるが、発掘調査事例が多い地域では、小規模墳が普遍的に存在することも、前期の特徴と言える。前期後半には、古墳の大型化が顕著で、古墳時代を通じて最大規模の古墳が、前期後半に築造される地域も多い。ただし、会津盆地の一部を除くと、大型古墳による系譜は安定しない。

a) 新潟西部では、前方後方墳・前方後円墳が存在し、大型古墳が存在する。しかし、会津盆地と比べると、全般に古墳の規模は小さい。そのこともあり、首長墓と見なしうるような大型古墳の系譜は明確に追うことが難しい。

b) 新潟東部は、従来は前期古墳の空白域であったが、胎内市城の山古墳が前期後半の大型円墳であることが、近年確認された〔水澤 2006〕。

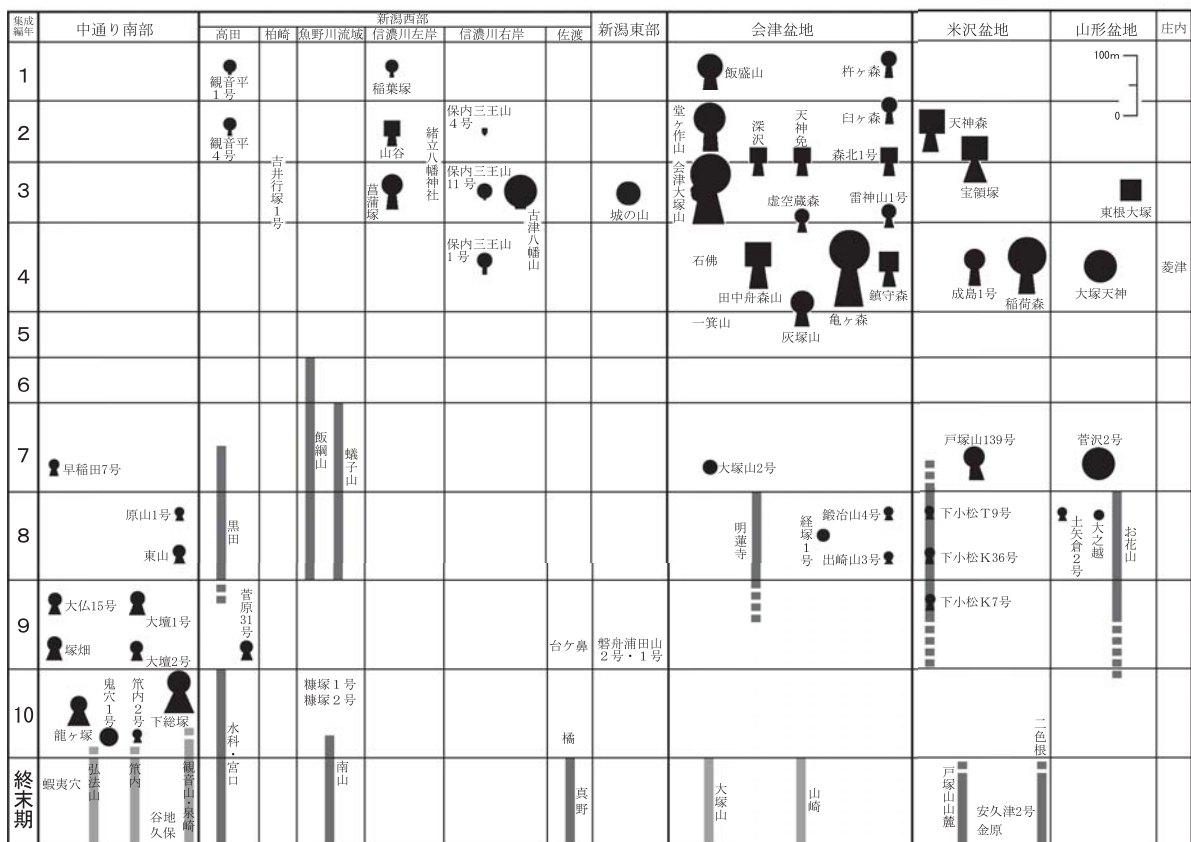
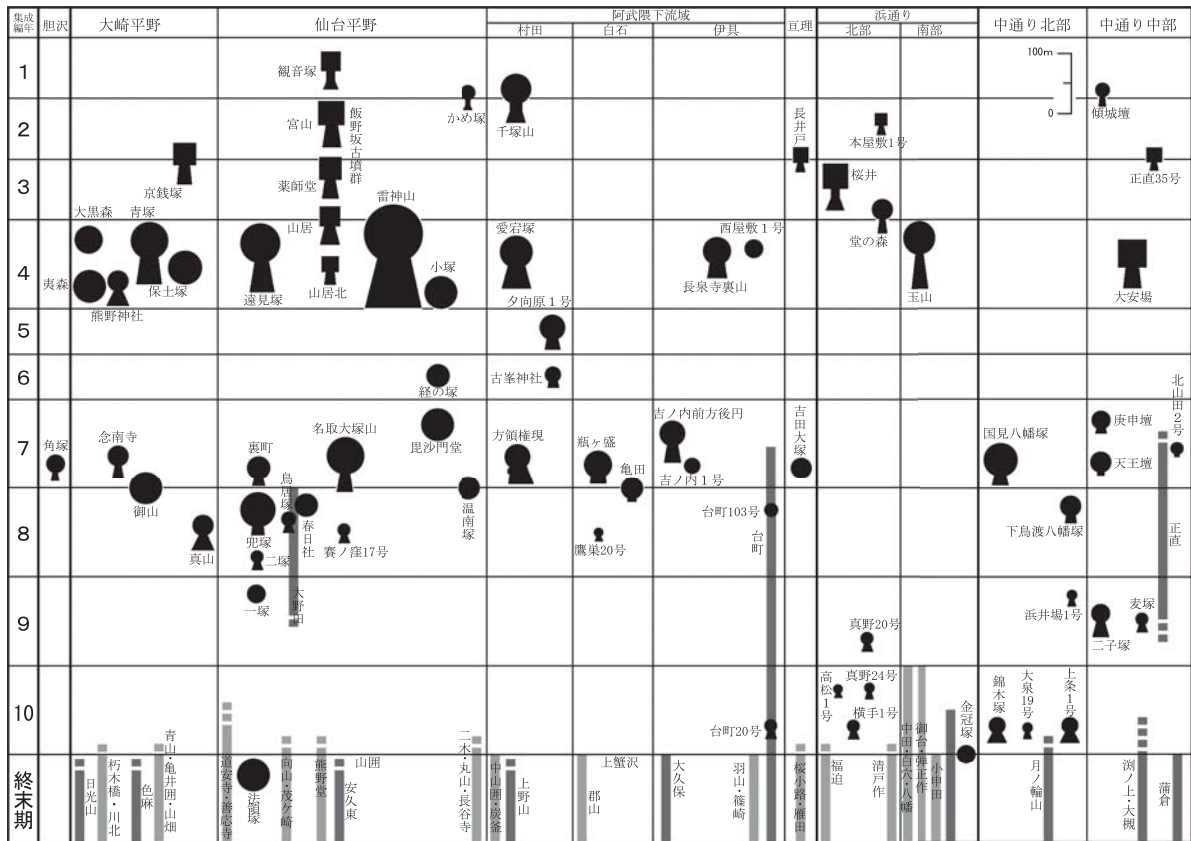
c) 会津盆地は、前期古墳の様相が最も良く判っている。会津盆地では、弥生時代終末期から北陸系の土器などの流入が始まり、同時に溝で区画された墓が波及してくる。さらに、古墳時代の開始とともに、前方後円墳・前方後方墳の築造が開始される。会津盆地の前期古墳は、その規模や分布のあり方から、大型・中型・小型に区分することが可能で、三重の階層構造が確認される〔藤沢 2004a〕。調査が比較的進んでいることもあり、小型古墳が普遍的に存在することが明らかとなっている。大型古墳の系譜は、1～3 期までは会津若松地域に最大規模の古墳が存在し、この地域で大型古墳の系譜が続くが、4 期になると会津坂下地域の亀ヶ森古墳〔吉田ほか 1993〕が最大規模の古墳となる。

d) 米沢盆地では、前方後方墳・前方後円墳が比較的多く存在し、大型の古墳も含まれる。しかし、これらの古墳は小地域で 1 ないし数基にとどまり、首長墓系譜が安定して継続していく地域は見出し難い。

e) 山形盆地では、前期に遡る確実な前方後方墳・前方後円墳は確認されていない。方墳と円墳が確認されている。中でも前期末の山辺町大塚天神古墳は径 51 m の大型円墳で、埴輪が伴っている〔三浦 2003〕。前期に遡る埴輪は、東北地方では極めて限定されており、その波及の契機が注目される。

f) 庄内平野では、菱津の石棺が存在する。鶴岡市大山の菱津で古くに出土し、墳丘などの情報はないが、石棺が残されている〔柏倉 1953〕。伴う遺物は知られていない。鶴岡市の致道博物館に菱津出土と伝えられるガラス小玉が 1 点所蔵されているが、この石棺との関係は不明である。組み合わせ式石棺で、定式化する以前の長持形石棺の一種と考えられ、前期末頃の年代が想定できる。おそらく、前期末にさかのぼる、有力な古墳が存在したものと考えられる。なお庄内平野では、この菱津の石棺に後続する確実な古墳が知られていない⁽⁶⁾。

前期古墳については、b) 新潟東部、e) 山形盆地において、前期後半に大型円墳が築造されていることが注目される。太平洋側でも、前期大型古墳の分布域の北限となる大崎平野では、西部の加美町（旧宮崎町）に夷森（大塚森）古墳（径 50 m）と大黒森古墳（径 36 m）、東部の美里町（旧小牛田町）に保土塚古墳（径 50 m）という、前期末の大型円墳が存在する〔辻ほか 2008〕。前期後半の大型円墳が、古墳分布域の最北端に多数見られることは注目される。ただ、古墳の様相について



(濃い線は古墳群、薄い線は横穴墓群)

図2 東北地方と新潟県域での主要古墳の編年

は、埴輪・葺石の有無をはじめ、それぞれに異なっており、直接的な関連を見出すことは難しい。

＝中期前半(5・6期)＝

前期後半から一転して、a)～f) まで全ての地域で、古墳はほとんど造られなくなる。c) 会津盆地で 5・6 期に下る可能性のある古墳も少数存在するが、それ以外では、5・6 期に築造された可能性のある古墳はほとんど見出せない。前期に多数築造されていた小規模古墳も、この時期にはほとんど見られなくなる。ただし、a) 新潟西部の中で、魚野川流域の飯綱山古墳群では、6 期に古墳群の形成が開始されている可能性もある〔橋本 2001〕。

太平洋側でも、ごく一部を除いて、5・6 期に築造された古墳は、ほとんど存在しない。古墳築造が衰退する現象が、新潟県域から南東北の全域に至る、広範な地域で共通して見られることとなる。

＝中期後半～後期前半(7・8期)＝

多くの地域では、7 期に新たな古墳築造が始まり、活発な古墳の築造が 8 期に継続していく。8 期には、古式群集墳の築造が見られる地域も多い。このような 7・8 期の様相は、太平洋側と基本的に共通する。しかしながら、b) 新潟東部と f) 庄内平野では、当該期の確実な事例を欠いている。またこの時期には、太平洋側では窖窯焼成の埴輪が樹立される古墳が多いが、日本海側では、窖窯焼成の埴輪は会津盆地に 1 例と、山形盆地に 4 例が確認されるだけである。

a) 新潟西部では、高田平野や魚野川流域で、8 期に古式群集墳が盛行する。ただし、新潟平野西部では、当該期の古墳は少数である。

c) 会津盆地では、この時期に築造される古墳は多いが、ほとんどは円墳で占められている〔菊地 1999〕。前方後円墳で、この時期か次の 9・10 期に下る可能性のある古墳もいくつか存在するが、いずれも規模は 20 m 前後のものである。円墳にも規模の大きなものは見られず、中規模円墳が存在するだけである。

d) 米沢盆地では、米沢市戸塚山古墳群の山頂古墳群の 139 号墳（墳長 54 m）などの大型の前方後円墳が存在するが〔加藤・亀田・手塚ほか 1983〕、分布は限られている。川西町下小松古墳群では、小規模前方後円墳が、この時期に多数築造されている〔斎藤 2001〕。

e) 山形盆地では、山形市菅沢 2 号墳という大型円墳が存在する〔藤沢 1991〕。菅沢 2 号墳では、器財埴輪を中心とする形象埴輪がセットで波及しており、畿内もしくはその周辺地域との関係が、直接的か否かは別として、想定できる事例である。前方後円墳は、上市市土矢倉 2 号墳のような、小規模なものが知られているにとどまる〔柏倉・武田・伊藤 1969〕。山形市お花山古墳群は、8 期を中心に築造された古式群集墳である〔長橋・佐藤・渋谷 1985〕。

f) 庄内平野では、当該期にも、確実な古墳が存在しない。

＝後期後半(9・10期)＝

9 期・10 期には、多くの地域で、再び古墳築造が衰退する現象が見られる。新潟西部を除く日本海側のほとんどの地域において、9・10 期に築造された古墳は、大きく減少すると考えられる。7・8 期から古墳築造が続く場合も、遅くとも 9 期の内に終了している可能性が高い。

太平洋側では、福島県中通り地方と宮城県南部の阿武隈川下流域、福島県浜通り地方では、9期ないし10期の前方後円墳が存在し、墳長が50 mを越える大型の前方後円墳も見られる。これらの地域には、9期に古墳築造が低調になり前方後円墳が見られなくなっても、10期に前方後円墳の築造が復活する地域もある。しかし、太平洋側でも、宮城県中部の仙台平野以北では、9・10期に築造された古墳は、ほとんど確認できない状況にある。

a) 新潟西部では、高田平野・魚野川流域・佐渡において、10期に横穴式石室墳が出現する〔小黒1997〕。

b) 新潟東部では、村上市磐船浦田山2号墳・1号墳が9期に築造されたと考えられている〔甘粕ほか1996〕。竪穴系横口式石室と考えられ、北陸地方を経由して波及してきたと考えられている。ただし、この2基の古墳以外には、前後の時期も含めて古墳が知られていない。

c) 会津盆地では、9・10期の確実な事例を欠いている。ただし、小規模前方後円墳には、山寄せ式で築造されたものが存在し、これらが9・10期に下る可能性が残る。

d) 米沢盆地でも、9・10期の確実な事例は、ほとんど見出せない。川西町下小松古墳群では、小規模前方後円墳を含め多数の古墳が8期に築造されていることは先述のとおりである。これらは、おおむね9期までに築造が終了した可能性が考えられ、10期の確実な例を欠いている。

e) 山形盆地でも、9・10期の確実な事例はほとんど見出せない。山形市お花山古墳群は、8期を中心に築造された円墳群であるが、一部にこの時期まで下る可能性のある古墳が存在するが、大多数は8期の内に築造されたと考えられる。

f) 庄内平野では、この時期にも確実な古墳が存在しない。

＝終末期＝

終末期では、古墳築造が見られる地域と、見られない地域との差が拡大する。終末期の古墳墓は、基本的に横穴式石室墳か横穴墓の、横穴系埋葬施設に統一される。ただし、横穴墓が広く分布する太平洋側とは異なり、会津盆地以外では横穴墓は見られない。

a) 新潟西部では、横穴式石室墳の築造が、前代から継続する。ただし、新潟平野西部では古墳がほとんど見られない。

b) 新潟東部では、確実な古墳が存在しない。

c) 会津盆地では、横穴式石室墳や横穴墓が存在する。横穴式石室墳は少数で、横穴墓が多数を占める。

d) 米沢盆地では、盆地東部を中心に横穴式石室墳が活発に築造される。高畠町の屋代川流域には、凝灰岩切石積み横穴式石室の金原古墳をはじめ、有力な終末期古墳が集中する〔北野ほか2002〕。

e) 山形盆地では、終末期に編年し得る、確実な古墳が存在しない〔北野2005〕。

f) 庄内平野でも、終末期古墳の確実な例は知られていない。

終末期で特筆される点は、e) 山形盆地やb) 新潟東部で確実な古墳が存在しないことである。新潟東部では、前段階に横穴式石室墳が見られるのに、終末期の古墳が見出せない。太平洋側も含めて、前代の9・10期に古墳築造が途切れる地域でも、終末期には横穴式石室墳や横穴墓の活発な築造が見られる地域がほとんどを占める中で、これらの地域の様相は特徴的である。

(3) 古墳の動向が示すこと

日本海側の古墳を概観してきたが、大きくは、太平洋側の動向と共通すると言って良いであろう。個々の古墳の様相については、それぞれに個性的である。しかし大きな変遷動向について見れば、必ずしも全ての地域にあてはまる訳ではないが、南東北や新潟県域の広範な地域で共通する変化を見せていることを指摘することができる。すなわち、前期古墳の広範な分布と前期後半での古墳の大型化、5・6期での古墳築造の衰退、7・8期に古墳築造が再度活発化することなどである。ただし、広域で共通する変化は7・8期までは見られるが、それより後の時期には、地域ごとの差が顕著となってくる。特に終末期には、日本海側では、山形盆地などで古墳が築造されない地域があり、太平洋側以上に地域ごとの差が顕著となる。

各地域の要因だけによって、このような広域にわたって共通する変化が見られることは考え難い。倭国域全体での政治的変動と連動した変化と考えるべきであり、政治的中心たる近畿地方中央部との関係を想定するべきであろう。5・6期の古墳築造が低調になる点については評価が難しいが、南東北から新潟県域の多くの地域で、同調していることを重視するべきであろう。

日本海側と太平洋側を問わず、南東北や新潟県域での、前方後円墳・前方後方墳をはじめとする大型古墳の動向を見ると、有力な古墳が継続しないことが指摘できる。首長墓と呼ばれるような、規模や内容で相対的に優位な古墳の系譜、いわゆる首長墓系譜が安定して見られる地域は、ほとんどない。古墳時代前期の、会津盆地と仙台平野では、大型の前方後円墳や前方後方墳が継起的に築造されており、首長墓系譜を追跡することが可能であるが、これら以外では、大型古墳が1基ないし2基程度しか存在しない地域も多い。そのため各地域の勢力が、相対的であれ独自に、古墳を継続して築造し続けていたとは考え難い。この点からも、東北地方や新潟県域の古墳は、他地域の勢力との政治的關係に、強く規定されていたことを示すものと考えられる。

一方で、後期後半から終末期にかけての変化は、様相が異なる。後期後半の9・10期には、福島県中通り地域と宮城県南部、福島県浜通り地域、新潟県域では、古墳築造が続けられる。しかし、これら以外の地域では、古墳の築造はきわめて低調となっていく。このように、大きく二つの地域に、様相が異なっていく。

さらに終末期には、前代に古墳築造が低調であった地域の中でも、福島県会津盆地、山形県米沢盆地、宮城県中部・北部では、横穴式石室墳や横穴墓が活発に築造される。しかし、新潟東部と山形盆地では、終末期の古墳墓が見られない。前代とは、また異なった地域ごとの違いが顕在化してくる。

重要と思われることは、時期が下るとともに、地域ごとの差が明確になっていくことである。むしろ新しい時期になって、地域独自の様相が強まっている。古墳時代後期から飛鳥時代にかけての時期は、律令国家が確立してくる時期と見なされ、中央政権による地方支配が強化されていった過程とされることが一般的である。しかし、東北地方や新潟県域の古墳の動向からは、中央政権に一元的に集約されていくような様相はうかがえず、逆に地方独自の様相が強まっていく。単純に、中央政権による地方の支配が強化されていったと見なすことは困難である。

③……………続縄文文化の動向

弥生時代後期以降、北海道の続縄文文化が、本州島へ南下していく現象が見られる。北東北においては、古墳文化に由来する土師器の伴う方形竪穴住居の検出例は極めて限定され、続縄文文化に伴う遺構や遺物が分布する。ただし、古墳時代併行期の、続縄文文化に伴う竪穴住居の検出例は、北海道を含めてもほとんど知られていない。ごく浅い構造の竪穴住居か、平地式住居であった可能性が想定されている。そのため、当該期の続縄文文化で検出される遺構は、平面形が楕円形を基調とする墓にほぼ限られる。古墳時代併行期の北東北では、このような墓と続縄文土器や石器などが、多数分布している（図3）。

このような続縄文文化が南下する現象は、日本海側では、いち早く見られる。これまでに知られている、本来の分布域を越えた続縄文文化系資料の拡大で、もっとも遡る事例は、新潟県柏崎市（旧西山町）内越遺跡における後北 C1 式土器である〔横山・坂井・山本 1983〕。後北 C1 式の中でも新しい段階と考えられ、弥生時代後期に併行する時期である。

本州島に分布する続縄文土器のほとんどは、次の後北 C2-D 式期以降のものであり、内越遺跡の事例は一段階早い時期にあたる。続縄文文化の南下が始まる時期に、分布の南限の新潟県域まで至っていることは、日本海側での続縄文文化系考古資料のあり方を考える上で重要であろう。

続く後北 C2-D 式期になると、続縄文文化に伴う資料の出土例は、北東北を中心に急増する。その中で、墓が検出された良好な事例のひとつが、秋田県能代市の寒川Ⅱ遺跡である〔小林 1988〕。平面が楕円形の墓が6基検出され、多数の後北 C2-D 式土器が墓の中に副葬されて出土している。1点だけ、弥生土器が副葬されており、弥生時代最末期の撚糸文系土器と考えられる。板状鉄斧も墓から1点出土しており、注目される。

古墳時代前期には、新潟県新潟市（旧巻町）南赤坂遺跡において、テラス状の遺構が検出され、その周辺から後北 C2-D 式の続縄文土器や石器が多数出土している〔相田 2002〕。土師器も多数出土しており、漆8～9群期のものと考えられている。南赤坂遺跡の東約600mのところには、新潟県域では最大規模となる墳長54mの前方後円墳、菖蒲塚古墳が存在する。菖蒲塚古墳の築造時期は前期後半と考えられ、南赤坂遺跡などとは、近接した時期となる。

北東北で検出されている続縄文文化に由来する、平面形が楕円形の墓では、時期が下るとともに副葬される土器における続縄文土器の比率が低下し、代わって土師器・須恵器の割合が増加していく。そのような様相を良く示すのが、秋田県横手市の田久保下遺跡である〔桜田ほか 1992〕。続縄文系の墓が8基検出されているが、副葬された土器は、1点が北海道系で残り17点は土師器であった。

上述のように、弥生時代後期から古墳時代前期には、新潟県域まで続縄文文化の遺物が分布している。古墳文化が主体的に分布する南東北に続縄文文化系の遺物が出土する事例は、太平洋側の宮城県北部から中部では、多数知られている。新潟県域での続縄文文化系の遺物の分布も、太平洋側と同様に、古墳文化と続縄文文化が密接に関係を有していたことを示すものと考えられる。

一方、山形県域での続縄文系遺物の発見例は極めて少ない。山形県の沿岸部では、庄内平野の西部においては、前期を含む古墳時代の各時期の、古墳文化の集落遺跡が発見されている。その中で、

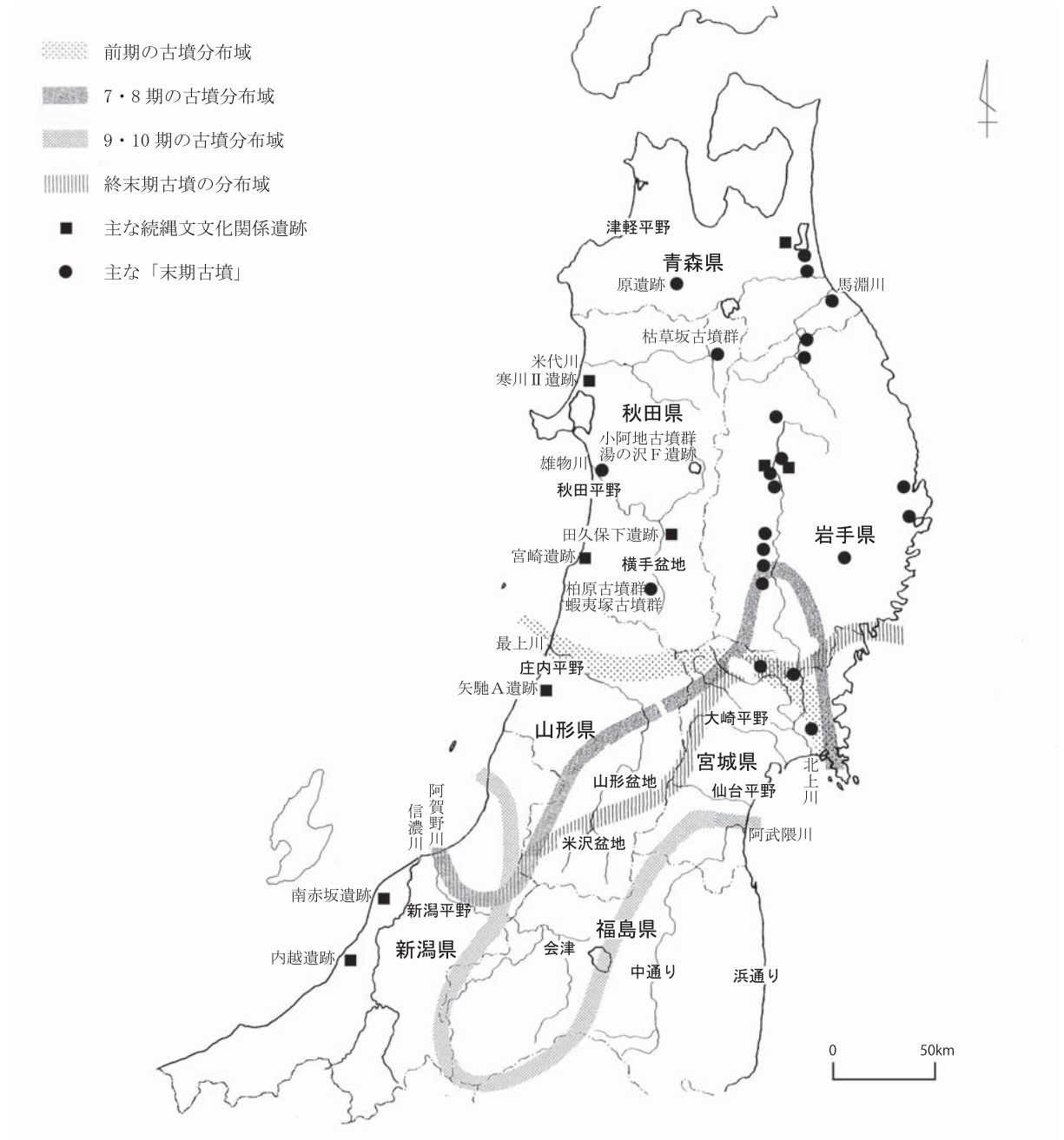


図3 東北地方の主な統縄文文化関係遺跡と「末期古墳」

鶴岡市矢馳 A 遺跡の黒曜石製の円形搔器など [阿部ほか 1988], 統縄文文化に伴う遺物が出土している遺跡がいくつか知られている。しかし、これらを除くと、山形県域での統縄文文化系遺物の発見例はわずかである。日本海沿岸部では、上述の庄内平野の一部を除くと、発掘調査事例が少ないため、発見されていないだけなのかも知れない。しかし、比較的発掘調査事例の多い、内陸の山形盆地や米沢盆地でも、統縄文文化系の遺物の確認例はほとんどない。

太平洋側では、宮城県北部の内陸部にあたる加美町湯の倉で産出する黒曜石が、統縄文文化において多用される。このことも関係して、太平洋側の統縄文文化系の資料は、内陸の北上川流域などに濃密な分布が見られる。日本海側の状況は、分布のあり方において、太平洋側とは大きく異なっている。

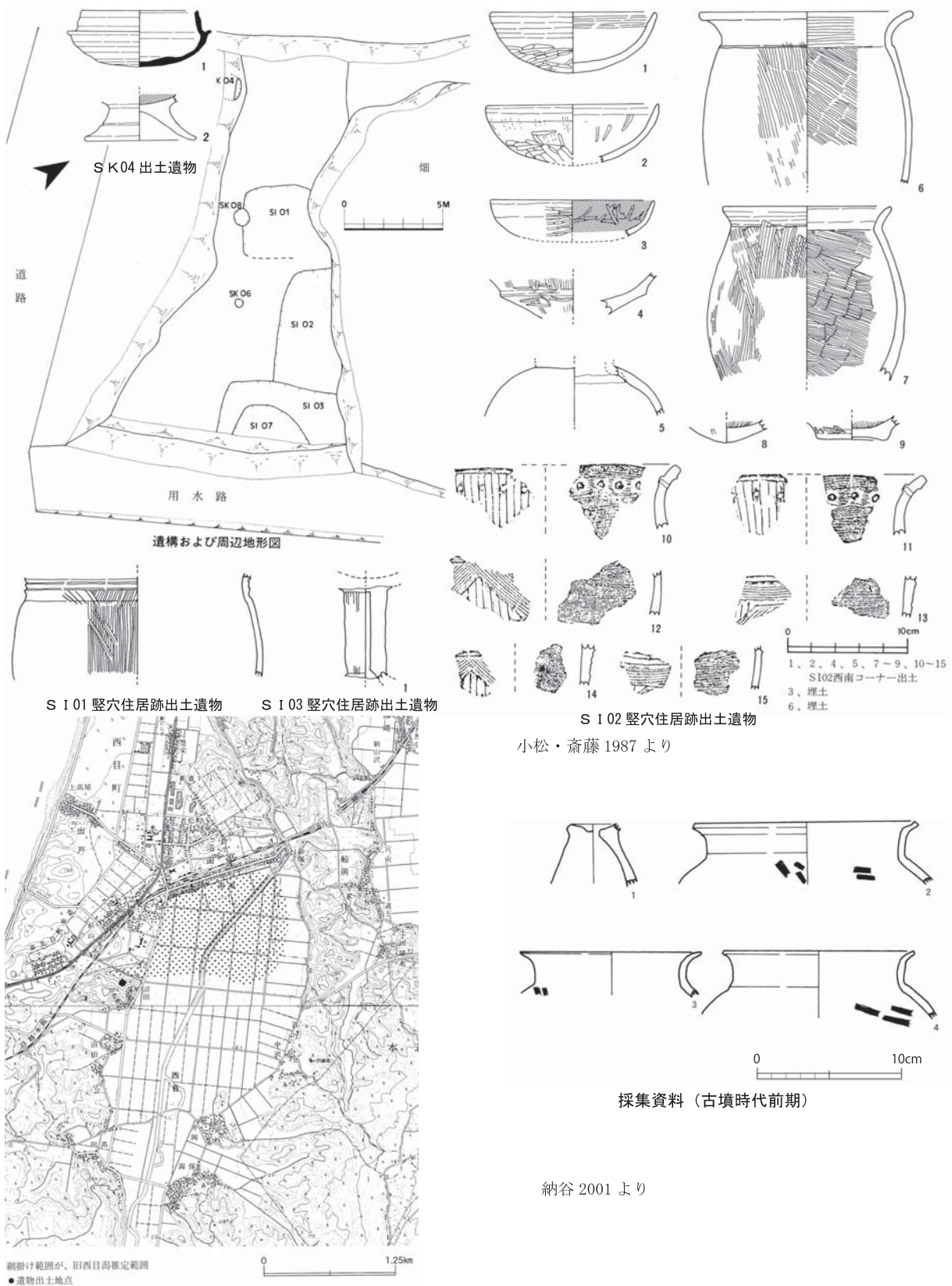


図4 秋田県由利本荘市宮崎遺跡

内陸部での分布が少ない一方で、沿岸部では遠距離の新潟県域まで分布していることが、日本海側の続縄文系遺物の分布の特徴である。このような日本海側の様相を考える上で重要と思われる資料が、秋田県由利本荘市（旧西目町）の宮崎遺跡である（図 4）。秋田県沿岸南部の中心市街である由利本荘市の旧本荘市は、子吉川の河口近くに所在する。この旧本荘市の少し南側を流れる西目川の河口に近い、潟湖（ラグーン）が存在した場所に宮崎遺跡は所在する。現在は水田となっているが、江戸時代までは潟湖が広く残っていたことが、絵図などから明らかとなっている。遺跡は、潟湖の西側に面した微高地上に立地している。発掘調査によって、土師器を伴う方形竪穴住居と土坑などが検出されている。土師器は、古墳時代中期後半の引田式併行期のものと考えられ、SI02 住居跡では北大式土器が伴出している〔小松・斎藤 1987〕。

この宮崎遺跡では、発掘調査された場所とは異なる地点から、古墳時代前期の土師器が採集されており、その特徴から北陸北東部系の土器であると考えられる〔納谷 2001〕。宮崎遺跡では、7 世紀の土師器も採集されており、繰り返し利用されていたことが明らかである。

宮崎遺跡の位置する潟湖は、山形県の最上川河口の庄内平野から、山形・秋田県境の鳥海山沿いの急峻な海岸地帯を越えたところに位置する。庄内平野からは、およそ 50 km ほどの距離がある。さらに 50 km ほど海岸沿いに北上すると、雄物川河口の秋田平野に達する。庄内平野から秋田平野へ、海岸沿いに航行した際、ちょうど中間に位置し、船舶の停泊に適した場所であった可能性が高い。このような立地の特徴を加味して考えると、古墳時代前期から繰り返し利用され、古墳文化と続縄文文化の交流・交易の拠点となっていた可能性を想定しても、大過ないであろう。

④……………「末期古墳」の動向

7 世紀になると、北東北では土師器を伴う方形竪穴住居が一般化する。集落立地も、水田稲作に適した低地に隣接した場所が一般的となり、再び農耕が北東北に展開していったと考えられる。ただし土師器は、南東北のものとは異なる特徴を有し、相対的に独自の様相を維持し続ける。

これとほぼ同じ時期に、「末期古墳」と呼ばれる小規模円墳群が、北東北で築造されるようになる。岩手県や青森県太平洋側においては、7 世紀前半まで遡る「末期古墳」の事例が知られており、土師器の伴う方形竪穴住居の波及と、ほぼ同時に新たな墳墓が成立してくると思われる。これら「末期古墳」は、階層性と連動性において、倭の古墳とは異なる展開を示し、倭の古墳の影響を強く受けつつも、北東北で独自に成立したものと考えられる〔藤沢 2004b〕。

「末期古墳」は日本海側でも、秋田県では古くからその存在が知られていた。米代川流域と雄物川流域の両地域で確認されている。近年では、青森県津軽地域でも確認されている。ただし、それらの分布状況は、太平洋側と比べると概して少ない。また発掘調査事例も少なく、そのため確実性に欠けるが、7 世紀に遡る事例は知られておらず、太平洋側より出現時期が遅れる可能性もある。

「末期古墳」の主体部は、木棺を墓壙に直接据え付けたものと、横穴式石室の退化した石室がある。日本海側では木棺直葬のみが知られており、石室墳は未確認である。木棺直葬の「末期古墳」は、墳丘が小規模であるため、後世に削平されて周溝と主体部のみが残っているものが、発掘調査によって初めて確認される場合が太平洋側では多数を占めている。そのため、発掘調査事例の少な

い日本海側では、未確認の事例が多く残されている可能性も考えておく必要がある。

課題が残っているのが、山形県の庄内平野に、かつて存在したとされる小規模円墳である。これらは『山形県の古墳』においても、大正年間の阿部正己の記録をもとに9例が示されているが、実態が明らかとなっている事例は皆無である[柏倉 1953]。これらが、倭の古墳文化に属するものか、あるいは「末期古墳」であるのかによっては、この地域の歴史的評価が大きく変わる問題である。

秋田県秋田市の湯の沢F遺跡では、墳丘を持たず主体部のみを構築したものであるが、「末期古墳」に普遍的に見られる「小口板埋め込み式」の木棺[藤沢 2009]を主体部とする墓が多数を占めている。築造年代は9世紀に下る例であるが、北東北の「末期古墳」の埋葬方法が、長期に渡って維持されていることを示す事例である。

⑤……………城柵遺跡の展開過程と蝦夷の領域

(1) 城柵遺跡の展開過程

7世紀後半以降、律令国家はその確立と同時に、北東北を中心とする地域に居住する人々を「蝦夷」と見なし、これらの人々を対象に、城柵に基づく特別の支配体制をとるようになる。文献史料に残された記載、および発掘調査の成果から、日本海側の城柵については、以下のような展開過程が考えられている(図5)。

淳足柵：大化3年(647年)設置

磐舟柵：大化4年(648年)設置

都岐沙羅柵：斉明4年(658年)初見

阿倍比羅夫の北方遠征(658・659・660)

出羽柵：和銅2年(709年)初見

秋田城：天平5年(733年)「出羽柵を秋田村高清水岡に遷置す」『続日本紀』

雄勝城：天平宝字3年(759年)設置

払田柵：9世紀初～

城輪柵：9世紀前半～

これらの城柵の内、秋田城・払田柵・城輪柵以外については、遺跡は発見されていない。淳足柵は新潟県中部、磐舟柵は新潟県東部に比定されている。都岐沙羅柵については、比定地についても諸説あり一致していない。秋田村移転以前の出羽柵は、山形県庄内地方に比定されている。雄勝城は、秋田県雄物川流域の横手盆地の雄勝郡に比定されている。

日本海側の城柵では、雄勝城と9世紀に初頭に設置された払田柵は、内陸部に所在する。この雄勝城と払田柵、比定地に問題が残る都岐沙羅柵を除くと、それ以外の城柵遺跡は、いずれも日本海沿岸部に所在する。日本海側の内陸部に、史料に残されておらず、未発見の城柵が存在する可能性は否定しきれないものの、主体は沿岸部にあったと考えて良いであろう。太平洋側の城柵が、仙台平野や北上川河口付近を除くと、内陸部に多数が存在することとは、対照的である。

日本海側の城柵の特徴としては、太平洋側と比べると、短期間で北方へ展開していくことは、こ

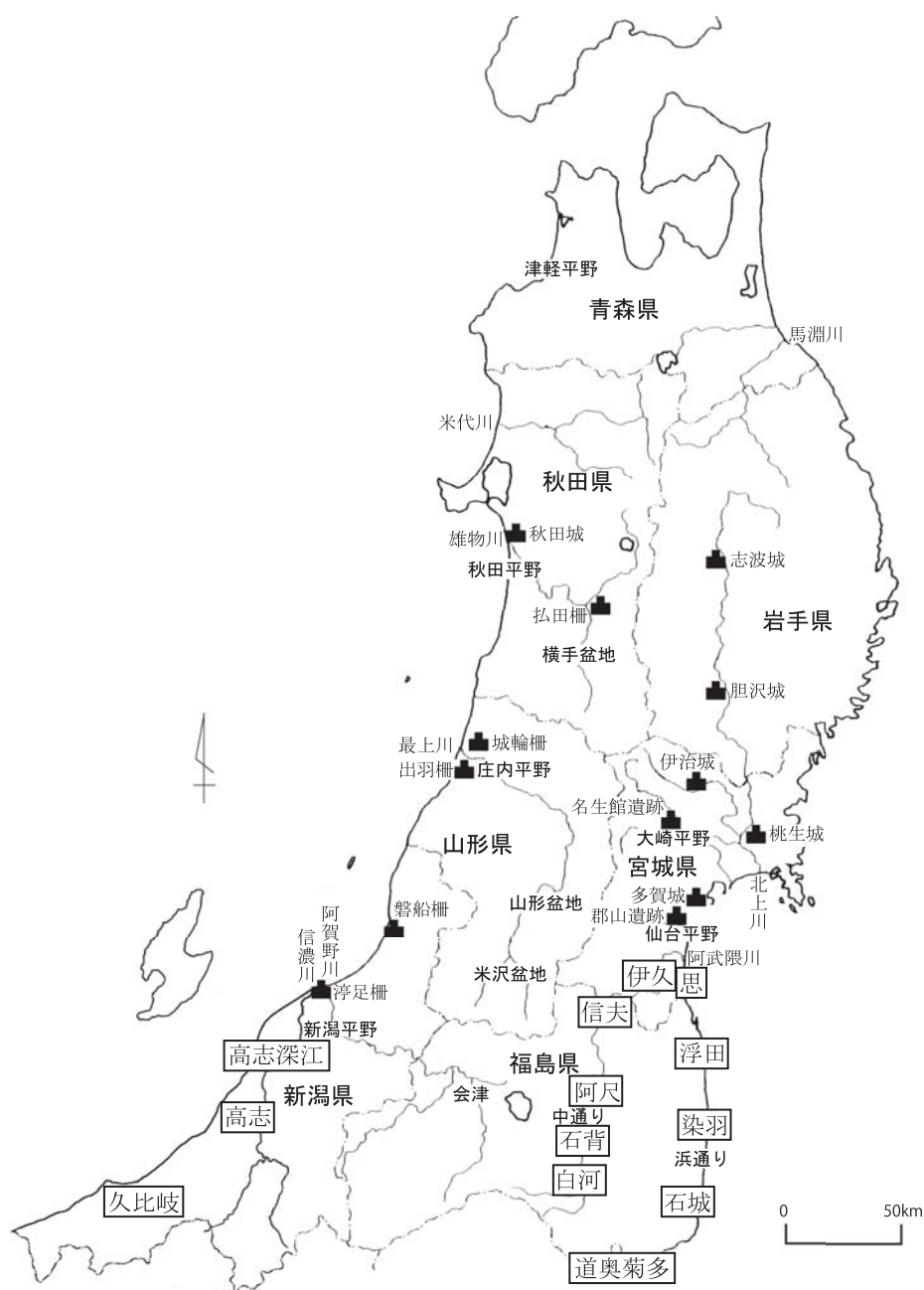


図5 東北・新潟地方の国造と主要な城柵の分布

れまでに指摘されてきた通りである。最も北側に位置する秋田城が、8世紀前葉に設置されている。太平洋側では、岩手県中部の胆沢城や志波城の設置は、9世紀になってからのことであった。

(2) 文献史料から見た蝦夷の領域

律令国家が蝦夷の領域をどのように認識していたかについては、文献史料の分析に多くを依拠して考える必要がある。これまでもたびたび紹介してきたが、今泉隆雄が重要な指摘を行っている[今

泉 1999]。大化元年（645 年）の東国国司の派遣記事の検討から、中央政府がこの時点で、国造のクニの外側の住人を蝦夷と認識していたと考えられることを、今泉は指摘している。国造の分布は、『国造本紀』（『先代旧事本紀』巻十）の記載から推定している。太平洋側は、「伊久国造」は伊具郡に比定され、「思国造」を亶理国造の誤記とすれば亶理郡に比定でき、国造の分布の北限は宮城県南部地域にあたる。日本海側は、「高志深江国造」の比定地域には問題が残るが、「高志国造」は古志郡、「久比岐国造」は頸城郡に比定され、その北限は新潟県中部にあたる。これら国造の置かれた地域の外側が蝦夷の領域と考えられ、太平洋側は仙台平野より北の地域が、日本海側では新潟県中部より北の地域が蝦夷の領域となる。さらに、蝦夷の領域と見なされた地域には、7 世紀後半以降、通常の支配機構ではなく、城柵が設置されていくことを指摘している。

熊谷公男は、『国造本紀』のみに依拠するのは危険であると指摘し、それ以外の史料から、蝦夷の領域を検討している〔熊谷 2004〕。日本海側について、次の 3 点の史料をとりあげている。

『日本書紀』大化 4 年（648）の磐舟柵造営記事に「蝦夷に備ふ」と目的が記載されており、城柵の周辺は蝦夷の居住地であったと考えられることを指摘している。また、新潟市の場遺跡から出土した「狄食」との文字を習書した 8～9 世紀のものと考えられる木簡を取り上げ、「狄」は日本海側の蝦夷を指し、「狄食」は服属した蝦夷に支給した食料を示すことから、8 世紀以降もこの地域に蝦夷が居住していたことを指摘した。これらのことから、日本海側沿岸部では、現在の新潟市付近から北側が蝦夷の居住地であったと考えられることを指摘している。

日本海側内陸部については、『日本書紀』持統紀 3 年（689）の、「陸奥国優嶋曇郡の城養の蝦夷」2 人が出家を願い出て許されるとの記事を取り上げている。「城養（柵養）の蝦夷」は城柵に附属する蝦夷を指し、優嶋曇郡はのちの出羽国置賜郡で、和銅 5 年（711）の出羽国設置までは陸奥国に所屬していた。この史料から、日本海側内陸部では、少なくとも米沢盆地以北には蝦夷が居住していたと考えられることを指摘している。

太平洋側については詳細な紹介は省くが、名取郡付近より北側が蝦夷の居住地であったと考えられることを指摘している。結果的に蝦夷の居住域は、『国造本紀』記載国造の分布地域の外側に相当することとなる。熊谷は、「高志国造」は越後国古志郡に比定され長岡市周辺、「久比岐国造」は越後国頸城郡に比定され新潟県西部とする。「高志深江国造」は越後国蒲原郡信濃川下流域に比定するのが一般的であるが、越後国頸城郡沼川郷深江村説を採用し、上越市から西の海岸部に比定されるとしている。

⑥……………東北地方日本海側の特質―太平洋側との比較から

（1）海上交通路の問題

これまで東北地方日本海側の様相を、新潟県域も含めて概観してきた。古墳の展開過程など、太平洋側と共通するところが多いが、一方で異なる点も見られる。日本海側と太平洋側で大きく異なる点だが、縄文文化系の考古資料の分布である。全般に太平洋側より資料が少なく不明な点が多いが、太平洋側のように、内陸に濃厚な分布を示さない。ところが日本海沿いの地域では、新潟県域

まで、きわめて遠距離にまで、その分布がおよんでいる。さらに注目されることは、新潟県内越遺跡の事例に見られるように、続縄文文化系遺物の拡大期の、最も初期に、新潟県域までおよんでいることである。

太平洋側では、宮城県北部の湯の倉に、続縄文文化で多用された黒曜石産地が存在することが、内陸地域に続縄文文化系資料が濃密に分布する理由の一つと考えられる。そのことも関係していると推測されるが、岩手県域から宮城県域にかけての続縄文文化と古墳文化の双方の交通路は、内陸の河川流域に沿ったものが中心であったと考えられる。

日本海側では、黒曜石の産地で、湯の倉のように続縄文文化に多用されたものは見つかっていない。そのため、続縄文文化が本州島北部に南下してく際の契機やその意味については、太平洋側と日本海側では、必ずしも同一ではなかったと考えられる。先に指摘したように、続縄文文化系の考古資料は、日本海沿いでは、特に遠距離まで分布し、最も早い時期に遠距離まで及んでいる。さらに、秋田県宮崎遺跡のように、海上交通の要衝と考えられる場所に、続縄文文化と古墳文化の交流を示す重要な遺跡が存在する。これらの点から考えると、日本海側では、海上交通路が重要な位置を占めていた可能性を指摘することができる。

日本海側の海上交通については、阿倍比羅夫の北方遠征の内容などから、古代においても、その重要性が指摘されてきた。秋田城が8世紀前葉に設置されるように、日本海側の城柵が、太平洋側より短期間で北方へ展開していくこと背景にも、海上交通路の存在が指摘されてきた。このような海上交通路は、律令国家が初めて開拓したものではなく、伝統的な海上交通路を利用したと考えるべきであろう。そこで問題としたいのは、古墳時代における、東北地方日本海沿いの海上交通の主体者は誰であったのかという点である。

秋田県の宮崎遺跡に、古墳文化に由来する遺構・遺物が見られること、土師器の中には北陸北東部系のもが含まれることから、古墳文化を担った人々も、海上交通路を利用して北方へ航海したことは間違いない。一方、古墳時代には、交通の要所に前方後円墳をはじめとする大型古墳が立地することが各地で指摘されている。その中には、海上交通路を意識し、船舶から見えることを意図したと考えられる立地を示す事例も多い。しかし、新潟県東部から山形県域では、このような立地の古墳は発見されていない。そのため、古墳文化の側だけを大きく評価することはできない。

続縄文文化系の遺物の広がりを踏まえるならば、弥生時代終末期から古墳時代の海上交通は、続縄文文化を担った人々が主体的な役割を担っていた可能性も十分に考えられるであろう。その場合でも、続縄文文化だけの一方的な動きとは考えられない。続縄文文化と古墳文化双方の相互的な活動であり、その中で続縄文文化を担った人々が相対的に大きな役割を果たした可能性を考えるべきである。さらに注意しておきたいことは、弥生時代後期の天王山式系遺物も、日本海の沿岸沿いに北陸地方へ移動していることである。弥生時代終末期以降の続縄文文化系遺物の拡大と同様に、この天王山式期にも、北から南への動きが見られることである。両者が利用した海上交通路が、共通するものであった可能性も考える必要がある。そのような中で形成されてきた伝統的な海上交通路が、律令国家によって利用されていった可能性を想定して良いであろう。

(2) 考古資料の分布と倭(日本)人と蝦夷の領域

先に⑤(2)で紹介した、文献史料の検討による蝦夷の領域と、前後する時期の考古資料に基づく文化の違いについては、太平洋側の資料をもとにこれまでも検討してきた〔藤沢 2007〕。倭人と蝦夷の境界と、考古資料に見られる文化の違いとは、ほとんど対応しないことを指摘してきた。以下に太平洋側での検討結果の概要を紹介した上で、それを踏まえて日本海側の様相から考えられることを検討してみたい。

太平洋側で蝦夷の領域と見なされた仙台平野、大崎平野、迫川・北上川下流域は、古墳時代前期以来、古墳文化が安定して展開し続けた地域である。6世紀に古墳築造は低調となるものの、7世紀以降には、倭系の終末期古墳である横穴式石室墳や横穴墓が活発に築造されていく。7～8世紀の土師器で見ても、仙台平野と大崎平野は、大きくは南東北の土器様式に包摂される地域である。

古墳文化と続縄文文化の対峙という観点では、他に明確な違いを示すところがある。古墳文化が安定して展開した迫川・北上川下流域までと、それが見られない北上川中流域の間の方が、より明確な違いである。7世紀においては、横穴式石室墳・横穴墓が造られ、南部様式の土師器が主体を占める大崎平野以南までと、それより北の地域の間では比較的明瞭な違いが指摘できる。このような、考古資料の分布から、より明確な違いが現れる所とは異なった場所に、倭人と蝦夷の境界は設定されている。

そもそも、古墳時代を通じて、仙台平野から北上川中流域まで、古墳文化と続縄文文化に由来する考古資料は、入り組んだ分布状況を示す。考古資料に見える文化の違いは、常に漸進的な変移を示し、明確な境界は存在しない。境界は明確な境界線としてではなく、広い境界領域として現出している。古墳時代前期以来、大局的には古墳文化の中にありつつも、続縄文文化と直接的な関係を維持し続けた地域までが、蝦夷の領域と見なされたこととなる。考古資料の分布から言えば、最も不明確なところが境界とされた。倭(日本)人と蝦夷との境界に、考古資料の分布で一致するものは、6世紀における古墳分布と、城柵遺跡の分布だけである。

このような、太平洋側の様相から指摘してきた点は、日本海側でより明確に現れる。

日本海側では、蝦夷の領域と考えられていたと推測される、山形県域のほぼ全て、福島県会津盆地、新潟県域の東半部は、古墳文化が広がっていた地域である。これらの地域の中でも日本海沿岸部では、続縄文文化系の考古資料が分布するが、それらが主体を占める遺跡は知られていない。古墳の築造には著しい盛衰が見られるが、基本的には古墳文化が定着していた地域であり、続縄文文化系の資料は客体的に存在するだけである。

これらの地域では、6世紀に古墳築造は低調となり、特に6世紀後半には顕著である。蝦夷の領域とされた地域では、6世紀に古墳築造が極めて低調であるという点も、太平洋側と共通する。このことは、倭人と蝦夷の境界が、6世紀における政治的関係をもとに設定された可能性を示しており、蝦夷を政治的概念と考える見方に一定の妥当性が認められる。しかし、律令国家の蝦夷観には、異なった文化を有しているという認識が伴い続ける。ところが、倭人と蝦夷の境界と、日常的な生活文化を反映する遺跡・遺物の分布のあり方とは、ほとんど一致しない。両者には、あきらかな「ずれ」が存在している。

城柵が蝦夷に備えた施設であることは間違いないとしても、城柵が蝦夷の居住域の中に、最初から造営されたのかどうかという点には、検討の余地がある。蝦夷を新たに支配の対称とした 7 世紀の中央政権が、蝦夷の領域との境界に接する、倭人の領域に城柵を設置した可能性も考えておく必要がある。中央政権と蝦夷の間に、緊張関係が存在した場合には、直ちに蝦夷の領域内に支配拠点を設けることには危険性がある。そのため、蝦夷の領域から一段下がったところに最初の城柵を設けたとするならば、仙台平野は蝦夷の領域とは言えなくなる訳である。その場合でも大崎平野が蝦夷の領域となることは変わらず、この区域での「ずれ」は解消できない。しかし見方によっては、大崎平野の「ずれ」はわずかなもので、解釈によっては大きな問題とならないという意見もあり得る。ところが、日本海側の「ずれ」はきわめて大きく、とうてい埋められるものではない。倭人と蝦夷の境界と、考古資料に見られる文化の違いとは、ほとんど対応しないことは、日本海側ではより明白となる。

古墳時代に、古墳文化と続縄文文化の考古資料が、東北地方から新潟県域で混在する地域があることは、本論でも指摘してきた。そのことから、7 世紀以降の中央政権の蝦夷と認識した人々について、続縄文文化の影響を受けた、異なる文化を有した人間集団として理解しようとする意見も多い。しかし、続縄文文化の考古資料が、ほとんど存在しない山形県域内陸部の地域も、蝦夷の領域と認識されている。このことは、蝦夷という他者認識を、前代の古墳時代における続縄文文化の分布に、単純に結びつけることができないことを示している。

このような考古資料の分布と集団領域認識が対応しない事実は、考古資料の分布に見える文化の違いと人間集団の違いに関する考えを、根本的に見直すことを要求している。この点についても、繰り返し主張してきたところである〔藤沢 2007・2008〕。

人間集団は、その有する文化によって定義されるというのが、日本の考古学・歴史学において定説的位置を占めてきた考えである。これは、文化の同一性の追求から、実体のあるものとして人間集団を定義しようとする立場と言える。この考え方は、これまで一般的であった民族の定義そのものであり、民族の定義を問題にする必要がある。日本の考古学や古代史学において一般的な民族概念は、民族を客観的指標で定義可能な実体を有するものと考え、文化の同一性を追求することで民族を定義しようとする本質主義に基づく。文化人類学などでは、近年再検討が進み、本質主義的アプローチは厳しく批判されている。これらの再検討を踏まえ筆者は、民族を客観的指標で定義可能な実体を有するものとは考えない。他者あるいは他者と見なした集団との関係で創造される帰属意識を基盤とする主観的観念であると考ええる。

東北地方日本海側の古墳時代から古代にかけての考古資料の様相からは、文化は常に漸進的な変移を示し明瞭な境界は見出し難い。続縄文文化系の遺物が、沿岸部では新潟県までおよぶ一方で、内陸部にはほとんど分布しないことなど、一様ではない。日本海側の 6 世紀に古墳築造が衰退した地域の中でも、福島県会津盆地や山形県米沢盆地では、7 世紀以降には、倭系の終末期古墳である横穴式石室墳や横穴墓が活発に築造されていく。ところが新潟県域東部や山形県山形盆地では、7 世紀以降も古墳は築造されない。古墳文化が広がっていた一方で蝦夷の領域と見なされた地域の中にも、7 世紀には大きな差違が内包されている。その中で、倭人と蝦夷の境界とされたところは、6 世紀の古墳分布を除くと、文化的な差違が不明瞭なところである。文化的同一性を基準として境界

が設定されたのであれば、たとえば古墳文化が安定して広がった山形県域までとそれより北の地域というように、もっと異なった場所に境界が設定されても不思議ではないのに、現実には異なっている。このような日本海側の様相は、太平洋側と基本的に同じであり、本質主義的アプローチでは、倭人と蝦夷の差異を説明することは不可能なことはより明白となる。排他的で明確な文化的同一性は、先に存在するのではなく、ある「違い」をとりあげることで、「彼ら」と「われわれ」の境界が形成されるのである。

おわりに一境界創出のための他者認識

最後に、日本古代の律令国家の領域認識について、本論の検討結果をもとに考えてみたい。律令国家の領域認識は、律令国家が他者と見なした蝦夷に対する認識と表裏一体の関係にある。

本論では、日本海側の様相を整理してきた結果から、考古資料の分布から考えられる文化の違いと、律令国家の領域認識が大きくずれることを指摘した。太平洋側においても、考古資料の分布に見える文化の変移と律令国家の領域認識には、無視し得ないずれが存在することは、繰り返し指摘してきた通りである。そうであるならば、大和政権から律令国家へ至る中央政権が、なにゆえ実態とは多分にずれる「蝦夷」という他者認識をしたのか、という問題がある。

古墳時代の政治体制については様々な議論があるが、首長間の連合体的性格の強い政治的關係であったと考える。大和を中心とする中央と地方の政治的關係は存在するが、強固なものでなく緩やかであったと考える。前方後円墳出現期の様相から見ても、大和政権が支配を及ぼしたというよりは、利害をともにする各地の首長層が大和を政治的中心として結集したと見るべきであろう。さらに周縁地域の古墳の動向を見る限りでは、大和政権の側に、維持すべき支配領域という観念は存在しなかったと考えられる。南東北の古墳の消長を見ると、著しい盛衰が見られることは、本論でも指摘したところである。特に後期には、古墳の築造がほとんど見られない地域が、南東北の広い範囲で認められる。古墳の築造が、中央政権との何らかの政治的關係を反映していると考えられるならば、古墳築造の衰退は、かかる政治的關係が途切れたか、希薄になったと考えざるを得ない。中央政権の側が、一旦は政治的關係を取り結んだ地域を、自らの影響下につなぎ止めておこうとする意志を、これら不安定な古墳の消長から読みとることは困難である。

中央政権は、7世紀以降、中央集権的な国家形成を志向し、やがて律令国家が成立していく。その専制的な中央権力が支配を及ぼすべき、あるいは支配する正当性を有していると考えた領域と、外部との境界を創出する必要性があったと考えられる。その際、倭あるいは日本としてまとまりうる文化的同一性は存在していない。蝦夷との境界のあり方を見ても、蝦夷に対する倭人（日本人）を、文化的に分離できている訳でないことは明白である。すなわち、「我々が何者か」という、「我々」を限定できる実態も概念も存在していないと見るべきであろう。それでも、「我々」を明示しなければならぬならば、残る方策は、他者を認識し、「彼ら」とは異なるという形で示すことである。⁽⁷⁾

「蝦夷」という他者を認識することによって初めて、それとは区別される「我々」と他者との境界が創出でき、支配すべき領域を確定することができたのであろう。律令国家による「蝦夷」という名付けは、境界創出のための他者認識であったと考えるべきであろう。

このような、多分に実態と合致しない他者認識とそれに基づく支配体制は、その後の東北地方の動向に、いかなる影響を与えたのであろうか。伝統的な地域間の関係は、創出された境界によって簡単に断ち切れるものではなかったと思われる。そのような、境界にとらわれない地域間関係を維持しようとする在地社会の動きは、当然ながら律令国家との間に軋轢を惹起したことが想定される。一方で、律令国家によって創出された境界が、境界として実体化していった可能性も考えて、検討を深めていく必要があるだろう。

註

(1)——現在、東北地方と言う場合は、青森県・岩手県・秋田県・宮城県・山形県・福島県の6県を指すのが通常である。しかし、戦前には、この6県に新潟県を含めて、東北地方と呼んだ場合もある。近代における東北という地域枠組みの成立過程や、「東北」という呼称に込められた、近代国民国家の中で周縁化された意味合いについては注意が必要である〔河西2001〕。

(2)——7世紀から9世紀にかけて、東北北部を中心に築造される小規模円墳群については、「末期古墳」と呼称されてきた。これは、北上川中流域の8世紀の事例が、主に知られていた段階に提唱されたものである〔伊藤1967〕。7世紀に遡る事例が増加した現在では、従来の呼称がふさわしいか否か、あらためて検討する必要があると考えられるが、本稿では、これまでの呼称に従って「末期古墳」という用語を使用する。

(3)——南東北においても、古墳時代の全ての時期を通じて集落が継続して展開するのか、あるいは盛衰が見られ、断絶する場合があるのかについては、あらためて検討していく必要がある。これまでに知られている資料では、古墳の築造が低調な時期・地域では、集落遺跡の調査事例も少ない場合もあり、さらなる検討が必要である。

(4)——古墳編年にあたっては、東北・関東前方後円墳研究会などでの、当該地域を対象とした研究発表などの論考を参考にした。

(5)——本論の趣旨から、個別の古墳の詳細については特記される点以外は省略した。引用・参考文献リストも、本文中でふれたものに限定した。

(6)——庄内平野では、近年の検討で、古墳と考えられる事例の指摘がいくつかなされ、測量調査も行われている〔佐藤2004〕。それらの中には、古墳と認識すべき事例もあるが、年代を確実に比定できていない。これらの多くが前期に遡る可能性もあり、時期ごとの古墳の分布については、確実な事例では、日本海側では前期が最も北に広がることとなる。

(7)——弥生時代から古墳時代にかけては、「倭」という呼称が使われた。そもそも「倭」というラベルは、中国王朝から名づけられたものである。その指し示す内容は、「倭国」あるいは「倭種」と、必ずしも一定していないが、中国王朝の側からの他者認識である。名づけられた「倭」というラベルは、古墳時代を通じて、大和政権の支配層も使用し続けたが、律令国家が確立していくとともに「日本」として名乗っていくこととなる。

引用・参考文献

- 相田泰臣 2002 『南赤坂遺跡』巻町教育委員会
相田泰臣 2009 「新潟県—弥彦・角田山麓を中心に—」『前期古墳の諸段階と大型古墳の出現』第14回東北・関東前方後円墳研究会
阿部義平 1999 『蝦夷と倭人』青木書店
阿部義平編 2008 『特定研究北部日本における文化交流—続縄文期』国立歴史民俗博物館研究報告143・144
阿部明彦ほか 1988 『鶴岡西部地区遺跡群 矢馳A遺跡・矢馳B遺跡・清水新田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第127集
甘粕健ほか 1989 『保内三王山古墳群』三条市教育委員会・新潟大学考古学研究室
甘粕健ほか 1993 『越後山谷古墳』新潟県巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室
甘粕健ほか 1996 『磐舟浦田山古墳群発掘調査報告書』新潟県村上市教育委員会・新潟大学考古学研究室
石川日出志 2000 「天王山式土器中期説への反論」『新潟考古』11
伊藤玄三 1967 「末期古墳の年代について」『古代学』第14巻第3・4号

-
- 今泉隆雄 1992 「律令国家とエミシ」『新版古代の日本』第9巻 角川書店
- 今泉隆雄 1999 「律令国家と蝦夷」『宮城県の歴史』山川出版社
- 今泉隆雄・藤沢敦 2006 「東北」『列島の古代史1 古代史の舞台』岩波書店
- 大谷 基 2006 「東北地方南部地域の様相—宮城県・山形県・福島県—」『前方後円墳とその周辺』第11回東北・関東前方後円墳研究会
- 大谷 基 2008 「前期・中期における円墳の様相—宮城県を中心に—」『前期・中期における大型円墳の位置と意味』第13回東北・関東前方後円墳研究会
- 大塚初重・小林三郎編 1995 『山形県川西町下小松古墳群 (1)』東京堂出版
- 小黒智久 1997 「越後・佐渡の横穴式石室と前方後円墳」『横穴式石室と前方後円墳』第2回東北・関東前方後円墳研究会
- 柏倉亮吉 1953 『山形県の古墳』山形県文化財保護協会
- 柏倉亮吉・武田好吉・伊藤忍 1969 『土矢倉古墳—山形県における埴輪古墳の研究』上市市教育委員会
- 加藤稔・亀田晃明・手塚孝ほか 1983 『戸塚山第137号墳発掘調査報告書—戸塚山古墳群調査報告書第Ⅰ集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第9集
- 川崎利夫 2001 「置賜地域における横穴式石室の築造年代について」『うきたむ考古』第5号
- 菊地芳朗 1999 「古墳の諸段階と地域権力—会津若松市域の古墳を中心に—」『会津若松市史研究』創刊号
- 北野博司ほか 2002 『置賜地域の終末期古墳1』東北芸術工科大学考古学研究室
- 北野博司 2004 「置賜地域の横穴式石室」『出羽の古墳文化』高志書院
- 北野博司 2005 「山形県内陸部の終末期古墳」『前方後円墳以後と古墳の終末』第10回東北・関東前方後円墳研究会
- 北野博司ほか 2009 『置賜地域の終末期古墳2』東北芸術工科大学考古学研究室
- 熊谷公男 2004 『古代の蝦夷と城柵』吉川弘文館
- 黒田篤史 2004 「東北南部」『東日本における古墳出現について』第9回東北・関東前方後円墳研究会
- 小林克ほか 1988 『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第167集
- 小林三郎編 1999 『下小松古墳群 (2)』川西町埋蔵文化財調査報告書第18集
- 小松正夫・斎藤俊明 1987 『宮崎遺跡発掘調査報告書』西目町教育委員会
- 斎藤敏明 2001 「山形県の中・後期古墳」『中期古墳から後期古墳へ』第6回東北・関東前方後円墳研究会
- 桜田隆ほか 1992 『秋田ふるさと村 (仮称) 建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第220集
- 佐藤禎宏 2004 「庄内地域の古墳」『出羽の古墳時代』高志書院
- 佐藤鎮雄編 2008 『出羽国ができるころ—出羽建国期における南出羽の考古学—』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 高橋千晶 1992 「置賜地方における「終末期古墳」」『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤稔先生還暦記念会編
- 辻 秀人 1996 「蝦夷と呼ばれた社会」『古代蝦夷の世界と交流』名著出版
- 辻秀人ほか 2008 『大塚森古墳の研究』東北学院大学論集「歴史と文化」第43号
- 手塚 孝 2004 「置賜地域の古墳概要」『出羽の古墳文化』高志書院
- 長橋至・佐藤正俊・渋谷孝雄 1985 『お花山古墳群発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第85集
- 納谷信広 2001 「西目町宮崎遺跡出土の土師器について」『秋田考古学』第47号 秋田考古学協会
- 新潟市歴史博物館 2007 『西暦647年にいがた—淳足柵の謎にせまる—』
- 橋本博文 2001 「中期古墳から後期古墳へ—基調報告新潟県—」『中期古墳から後期古墳へ』第6回東北・関東前方後円墳研究会
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版社
- 藤沢 敦 1991 『菅沢2号墳』山形市教育委員会
- 藤沢 敦 2000 「栗原・登米・本吉地方の古墳墓」『阿部正光君追悼集』
- 藤沢 敦 2001 「倭の周縁における境界と相互関係」『考古学研究』第48巻第3号
- 藤沢 敦 2004a 「陸奥の首長墓系譜」『古墳時代の政治構造』青木書店
- 藤沢 敦 2004b 「倭の「古墳」と東北北部の「末期古墳」」『古墳時代の政治構造』青木書店
-

-
- 藤沢 敦 2007 「倭と蝦夷と律令国家—考古学的文化の変移と国家・民族の境界—」『史林』第 90 巻第 1 号 史学研究会
藤沢 敦 2008 「国民の歴史への批判的介入—地域研究の射程—」『博古研究』第 35 号 博古研究会
藤沢 敦 2009 「墳墓から見た古代の本州島北部と北海道」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 152 集
藤沢 敦 2010 「各地域における前方後円墳の終焉 東北」『前方後円墳の終焉』雄山閣
三浦浩人 2003 『大塚天神古墳第 4 次発掘調査概報』山形県山辺町埋蔵文化財調査報告書第 12 集
水澤幸一 2006 『市内遺跡 I』胎内市埋蔵文化財調査報告第 1 集
八重樫由美子 2004 「北陸—富山・新潟」『東日本における古墳出現について』第 9 回東北・関東前方後円墳研究会
吉田博行ほか 1993 『亀ヶ森古墳』会津坂下町教育委員会
横山勝栄・坂井秀弥・山本肇 1983 『内越遺跡』新潟県教育委員会

（東北大学埋蔵文化財調査室，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2012 年 9 月 26 日受付，2013 年 3 月 26 日審査終了）

Aspects of the Districts Bordering the Japan Sea in the Tohoku Region from the Kofun Period through to the Asuka and Nara Periods

FUJISAWA Atsushi

Archaeological evidence from the Kofun period through to the Asuka and Nara periods, discovered in the districts bordering the Japan Sea in the Tohoku region, was examined comprehensively. Particularly, the following four points were examined to give an overview: 1) aspects of late Yayoi period; 2) the construction trends of *kofun* (ancient burial mounds) in the southern Tohoku region; 3) aspects of post-Jomon culture centering on the northern Tohoku region; and 4) “*kofun* in the terminal stage” developed from the 7th century onward in the northern Tohoku region. Moreover, concerning an outline of the *josaku* (government fortification) sites, and the Emishi territories, the author confirmed the study results of historical bibliographies. Based on this acknowledgement, while comparing the characteristics of Japan Sea side districts with the Pacific seaboard districts, the relation between a change in archeological evidence and the Emishi territories found in historical bibliographies was examined, and then the perception of domains by the national administration promoting the *ritsuryo* codes was considered.

Up until the first half of the late Kofun period, construction trends of *kofun* in the Japan Sea side districts basically show similar variations to those seen in the Pacific seaboard districts; for this reason, it can be considered such changes were made in conjunction with political transformation throughout Japan. However, after the second half of the late Kofun period, regions can be classified into two types – regions with the continued construction of *kofun*, and those with no construction – giving obvious differences among regions. At the terminal stage, regional differences became more noticeable compared to the Pacific seaboard districts. Closer to our own times, aspects unique to a region were strengthened; therefore, it cannot be considered that local control by the central government was strengthened.

Archaeological evidence of post-Jomon culture found in the Japan Sea side districts is distributed up to the Niigata Prefecture area, which ranges over a considerable distance. At those places considered to be important for sea traffic, sites are found that indicate the interchange of post-Jomon culture and *kofun* culture. These points offer the strong possibility that sea lanes were in an important position on the Japan Sea side districts, along with a possibility that those people who led the post-Jomon culture played a major role in this positioning.

The Emishi territories found through examination of historical bibliographies hardly corresponds

to the cultural differences seen in the archaeological evidence. In the Japan Sea side districts, almost the entire area of the Yamagata Prefecture, Aizu Basin in the Fukushima Prefecture, and the eastern half of the Niigata Prefecture, all of which are assumed to be the Emishi territories, were areas where *kofun* culture was spread. There is a clear difference between them, which is larger compared to the Pacific seaboard districts. This fact demands the fundamental reconsideration of the current concepts concerning cultural differences found from distribution of archaeological evidence and differences among human groups. Exclusive cultural identity does not come first; it should be thought that a boundary between “them” and “us” is formed by focusing on any perceived “difference.” Based on these examinations, it is possible to consider that the term “Emishi” as used by a nation promoting the *ritsuryō* codes was coined from a particular perception of another group to create a boundary.

Key words: Kofun culture, post-Jomon culture, *jōsaku*, Tohoku region, Japan sea, sea traffic